

夢

追

い

人

永年に亘り職人達が受け継いだ  
伝統の技、こまやかな神経が  
行き届いた本格純木家具



(有)木精舎

代表取締役 古賀俊一さん



木精舎の製品は、職人の技

術が存分に反映されている。

社長の古賀さんは、大川の伝

統工芸を受け継ぐ一人と言っ

ていいだろう。職人としての

妥協を許さない姿勢が話を通

じてピンピン伝わってくる。「陶

器師のように、製品が完成し

ても気に入らないと、壊して

しまつ」こともあるという。

素材選びから完成まで決し

て妥協しない。どのようにな

あろうか。

素材選びは、必ず自り行う。

木材市場に出向いて、気に入

った丸太を購入する。丸太に

も当たりはずれがあるそうだ。

それだけに選ぶ時には神経を

使う。木取りは、製材所に委託

するが、必ず立ち会う。その後

二年間も材を天然乾燥させる。

それから木材の水分量を約八

%前後まで落とすため、人工

乾燥機に掛ける。さらに養生

の期間を二から三ヶ月間が必

要だ。それは水分量を十から

十二%まで戻す過程である。

こうして初めて変形やふくら

んだりしない「本物の木」がで

きあがる。

そして、組み立て、塗装、仕

上げになる。これらの過程は

技術の見せ所である。

「製品の特徴は、一言で言え

ば、自然の形、模様を生かして

いることだ。しかも「使う人

の身になったデザインを考え

ることが基本姿勢」という。

それだけにとっても雰囲気

がよい。ギャラリー工房が、三瀬

トンネル近くの森林の中にあ

る。川のせせらぎ、葉のすりあ

う音が聞こえてくる。飾った

製品群を見せてもらった。時々、

紋切り型の表現として、木の



店内には自然素材で作られた  
雑貨やアクセサリーまでいろいろ



## 和風の中にも自然素材の 独特の風合いが出ている

ぬくもりが伝わってくる」といったものがあるが、まさにそうなのである。心が和む。見ていると日々のストレスが雪解けしていくようだ。自分の家で使いたい気持ちになってくる。

古賀さんは、進取の気性に富んでいる。絶えず、新しい構想、デザインを探索している。こうした特質はどのように持つようになったのだろうか。

古賀さんはこう述懐する「昭和三十八年頃、職人として従事していた会社から、半年間東京の職能大学に行かせていただきました。当時自分でも技術力には自信を持っていたのですが、全国から集まった精鋭たち、また講義のレベルの高さに正直大変なショックを感じました。もっ、送り出してくれた会社に恥をかかせてはならない一心で必死でした。毎日明け方、牛乳配達音がする頃まで勉強を続けたものです。」

この経験が大きな転機になった。単なる職人でなく、幅広

い視野を持つ、技術者としての礎ができたという。進取の気性も、こうした経験に由来しているようだ。

いま心を砕いていることは、職人の技術を後世に伝えること。ただ「工芸家のような趣にあこがれるのか、格好から入ってくる若者が多い」と嘆く。

一月十日(土)〜二月八日(日)まで大川市立清力美術館で第一回大川伝統工芸展が開かれる。もちろん(有)木精舎からも出品する。かたくなに自分たちの技術を信じ、日夜研鑽を重ねてきた職人たちの作品が並ぶ。読者には是非一見されるようにお勧めしたい。

木の香りがして  
一日の疲れを癒してくれそうだ

